

甲南Today

大学の未来が見える

No. 9
2002
3.1

甲南Today No.9



ボランティアで得たもの。

開学
50周年
記念特集

MOVE IN KONAN

「大学から世界に飛び出し、
何を学ぶ？」

2002年3月1日発行 [発行] 甲南学園広報室 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8丁目9-1 TEL 078 431 434(代)

シリーズ●甲南学園の20世紀 ⑨

昭和44(1969)年



60年代末、大学混迷の時代に、 初心を取り戻す、創立50周年記念式典を敢行。

全国で学生運動が最盛期を迎え、各大学の教育が混迷をきわめていた昭和40年代のはじめ、甲南学園でも時代背景を顧みて、昭和44(1969)年に行うべき学園創立50周年記念式典開催の是非が問われました。しかし、甲南の教育者たちは、混乱の時代だからこそ、この節目を初心に立ち返る機会として、新たな飛躍を目指すことを決意。あえて、式典開催に踏み切ったのです。

およそ2年にもおよび準備を経て、4月21日、創立50周年記念式典は、多くの関係者が見守るなか、華々しく幕を開けました。当時、唯一の創立関係者であった伊藤忠兵衛理事長は、その挨拶の中で、知育偏重ではなく、「德育」を重視した平生鈞三郎の教育理念について言及。50年の歩みの根底にある思いを教職員に再確認させ、以後の甲南教育の在り方を示しました。ここに、改めて心を一つにした甲南の教育者たちは、途中で乱入した一部の学生による反対デモにも引くことなく式典を続行。新たな一歩を踏み出したのです。

80年以上もの間、建学の理念を受け継ぎ、発展させてきた甲南学園。その揺るぎない歴史は、何ものにも屈せず、信念を貫いた先駆者の行動に築かれてきたと言えるでしょう。

平生鈞三郎のよひば

9

『いやしくも天与の才を有する以上、みな天才でないものはない』

平生鈞三郎著「私は斯う思ふ」(昭和11年発行)より

インターネットで甲南大学へ

<http://www.konan-u.ac.jp>



CONTENTS

- 01 Pick up the 甲南
阪神・淡路大震災犠牲者慰霊碑
- 02 WHAT'S NEW! KONAN
学生ベンチャー企業 K.C.&co. 設立総会
- 03 KONAN CAMPUS WATCHING
**ボランティアで
得たもの。**
- 07 キャンパスライフ ここが知りたい!
～ 図書館編～
- 08 MOVE IN KONAN シリーズ第5回
**「大学から世界に飛び出し、
何を学ぶ?」**
- 13 学びの最前線! アカデミック・ナウ
中易ゼミ
稲田研究室
- 14 KONAN PEOPLE 甲南ピープル
先輩から、後輩へ。受け継がれた想いが、
クリーン作戦を実現。
- 15 クラブ・サークル紹介
体育会ゴルフ部
文化会人文地理学研究会
- 16 キャンパス ダイジェスト
- 19 甲南学園の20世紀



今回の表紙
応援団の「あしなが学生募金」活動
昨年11月4日、あしなが育英会が主催する、
自死・病氣・災害で親を亡くした子どものため
の募金活動に、応援団が参加。三宮周辺の
街頭で声を張り上げるその姿に、街を行く多
くの方々が足を止めてご支援くださいました。

Pick up the 甲南

阪神・淡路大震災犠牲者慰霊碑



平成7年1月17日、まだ夜の闇も明けきらぬ神戸の街を突如として襲った大地震。その衝撃はあまりにも大きく、甲南学園でも37人もの関係者が、その尊い命を奪われました。学園はこの悲しみを決して風化させてはならないと考え、その事跡として、学園犠牲者慰霊碑を制作。黒御影石に、犠牲となった大学生16人(院生含む)、中高生徒2人、卒業生19人の氏名を刻み、平成13年4月20日、遺族を招いて完成の献花式を行いました。この石碑は、キャンパス内で最も学生の往来が多い、1号館玄関斜め向かいに置かれています。私たちはこれからも、あの日の思いを忘れることなく、後世に伝えていかなければなりません。それが残された者の使命であり、犠牲者への何よりの慰霊となるのではないのでしょうか。

WHAT'S NEW! KONAN

甲南大学初の 学生ベンチャー始動!

甲南大学起業家研究会による
会社組織「K.C.&co.」の
設立総会を開催

甲南大学の位置する東灘区は、ほかに多くの大学や短大を抱える文教地区。そこで、充実した学生ネットワークや若い行動力、感性といった、この地域ならではの財産を生かし、地域経済を活性化しようと、平成13年度から東灘区による「学生ベンチャー育成支援事業」が展開されてきました。「K.C.&co. Konan Company & community」はその支援を受け、起業に関心のある甲南大学生25人が中心となって立ち上げた初の学生ベンチャー。12月17日には、設立総会が開かれました。

起業家の卵たちに、 大きな期待と あたたかいエールが。

当日午後3時より始まった総会には、戸山晶夫理事長や吉沢英成学長、高橋佳子東灘区長をはじめとする各関係者が参加。また、新聞社や放送局など、取材に訪れたマスコミの姿も多く、社会での注目度の高さがうかがえました。代表取締役社長に就任した山中亮治さん(法学部3年次)は、新会社設立の挨拶として、「阪神大震災以降、地域経済は深刻な状況。でもそういった中こそ、私たちの若い力で埋もれているビジネスチャンスを見つけ出せるはず」と、学生らしく潑刺(はげしう)とした口調でその趣意を表明しました。続いて、総務部長の中尾良太さん(経営学部3年次)が議長に選任され、議事を進行。「定款の制定」に始まり、まずはK.C.&co.の設立を承認、「役員を選任」で各取締役を発表しました。そして、「平成13年度事業計画」では、市場調査代行や広告代理、インターネットビジネス、家庭教師の斡旋(ちゆけん)など、具体的な業務内容を報告。「平成13年度の



収支予算案」まで、初の総会は学生企業とは思えない本格ムードで進み、一般企業の株主総会さながらでした。最後に来賓の挨拶として、吉沢学長が、「地域と大学に活力を与えられるよう発展して欲しい」とその可能性に期待を表明。高橋東灘区長からも、「将来、本物のベンチャー社長が数多く出ることを期待します」とエールが贈られました。生まれたての学生起業家たちは皆、貴重な言葉を拝聴し、「学生であることを最大限に生かし、より多く社会と接していく中で、自己の能力も高めたい。ご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます」と真摯(しんしん)な姿勢で意欲を示しました。起業家の卵たちは、果たして、どんな活躍をしていくのでしょうか。今後の動きから目が離せません。



ボランティアで 得たもの。

甲南大学には、クラブ活動を通して、あるいは地域のコミュニティに参加する形で、震災遺児や障害を持つ人たちなどの支援に参加している学生が大勢います。昨年、広報室が行った調査によれば、実に、全学生のおよそ4人に1人が、何らかの形でボランティア活動に携わった経験を持っていました。今回は、なかでも学外での活動に積極的に参加した4人をインタビュー。誰かのために行動するという体験を通して、彼ら自身が感じたこと、身につけたことを報告します。

人と、分かち合っていて生きる。 その楽しさに気がついた。

文学部人間科学科 4年次 奥田真一朗さん

できる限りの時間を、遺児と共有。それが、唯一自分のできること。

僕はいま、事故や病気などで遺児となった子どもを支援する団体、あしなが育英会が、震災遺児のために作った「レインボーハウス」で、子どもの面倒を見ています。といっても、何か特別なケアじゃなくて、弟や妹と付き合うように、一緒に遊んだり、宿題を見たり、話し相手になったりという感じ。住んでいるのも、実はこの施設に併設されている学生寮なので、用事がなければ、ほとんど一日中彼らと会っていて、家族のような付き合いをしています。

こんなふうに話すとき、ただ、自分の時間を無駄にしていると思われるかも知れませんが、それは誤解です。



1999年にYMCAの施設を借りて行った「余島の集い」。遺児たちと初めて触れあい、本音を聞いた、忘れられない体験。

役員をしていたのがきっかけで、「レインボーハウス」建設の募金に携わり、その縁で、「レ」が竣工してからボランティアとしてお手伝いをしてきました。活動を通して感じるのとは、とにかく子どもたちの心の傷の深さ。普段は元気に遊んでいるのに、小さな揺れを感じただけで、いまでも涙を流す子がいるし、中学生にもなるのに明かりを消して眠れない子がいる。けれど、僕も父親を病気で亡くしているのだから、なんとなく共感できるのですが、彼らが求めているのは、その場限りの優しい言葉やモノじゃない。だから僕は、できるだけ多くの時間を彼らと共有することになっているんです。

そして、彼らを理解しようとする悩み、仲間と意見をぶつけ合ってきた体験は、僕自身をすごく成長させたとも思う。もし、「レ」になければ、僕は一人で、もっと要領よく生きていけたかも知れないけれど、いまは不器用でも人と分かち合っていて生きる楽しさを知りました。そんな自分を、前より少し誇らしく感じます。



将来は、子どもをさせることのできる仕事に就きたい。そう考えるようになったのも、ここで過ごすようになってから。

奥田さんが行ってきた活動を報告!

あしながPウォーク10

自死・事故・災害などで親を失った遺児たちの支援金を集めるボランティアウォーク、それが、あしながPウォーク10。「P」とは、やさしい人間愛を意味する「Philanthropy」の頭文字で、この活動の掲げるテーマ「やさしい人間愛社会の実現」を表しています。また、「10」は、道中10kmの道のりを歩くという意味です。全国47都道府県の約100コースで開催されており、奥田さんは関西ブロックの実行委員長として、この活動を率先。この活動は、彼らの頑張りのおかげで、ここ10年間に25万人の参加者と、3億円もの寄付金を集めています。

学内でボランティア活動を行っている団体

文化会児童福祉研究会

メンバー全員で行う全体活動のほか、子ども会・発達障害児・学童保育という3つのパートがあり、部員はそのいずれかに所属して活動。月に2回程度、子どもと直接触れあいますが、ただ遊ぶのではなく、子どもにどんなふうになって欲しいかという狙いをしっかり定め、そのために役立つ遊びを企画するところから始めます。



文化会マンドリン・ギタークラブ

毎年6月、老人ホーム「鶴林園」で、お年寄りを相手にコンサートを行っています。普段演奏する曲だけでなく、お年寄りに親しみやすい童謡の合奏なども行ってあり、ときには、一緒になって歌うことも。終了後は、日頃聞くことのできない話を聞かせてもらうなど、双方からコミュニケーションを取り合い、交流を図っています。



応援団

毎年、春と秋、あしなが育英会が主催しているレインボーハウス建設(東京)のための募金活動に参加。他大学の学生や高校生など、三宮周辺の街頭に立ち、自死、病氣、災害などで親を亡くした子どもの援助を呼びかけます。また、同会主催のボランティアウォーク、「Pウォーク」にも、春と秋の年2回参加しています。



いま、医療や福祉の現場で、人的ミスが頻発していますよね。僕は、両親がともに医療関係の仕事をしていることもあり、以前から、そうした問題がなぜ起こるのが気になっていました。それで、卒論のテーマに『医療ミス』を扱おうと決め、まずは直接現場を知るために、神戸老人ホームのボランティアに参加することにしました。

研究を目的に飛び込んだ福祉施設で、自発的に協力する大切さを実感。

老人ホームのケアの仕方を勉強させてもらいました。驚いたのは、介護員の方が、すごく細かいところまで気を回されていること。例えば、洗ったバケツをそのまま重ねると、中のバケツの底が濡れますが、それを次に使うときに廊下に置くと、滑りやすくなって危ない。一つひとつ拭いて片付けるんです。僕はそれまで、介護ミスはいいかげんな気持ちで原因で起こるものだろうくらいに思っていました。ところが、現場には、これだけ細かくケアできる人たちがそろっている。つまり、本当は人手の不足こそが大きな問題と気づいたんです。だとすれば、介護ミスは、ボランティアが増えればきつと減らすことができるはず。この体験を通して、はじめて、ボランティアがなぜ必要なのかを実感として知ることができました。



文学部社会科学 4年次 嶋名 孝次さん



現地の公立高校で日本語教師のアシスタントにも挑戦。この国で、人と出会う面白さ、大切さを知りました。



女の子だけで行うキャンプも。普段は、男の子が担当している作業もこなさなければならぬので大変ですが、かなり盛り上がります。



文学部社会科学 4年次 清水 美枝さん

私がボランティアに参加したのは、3年次に、留学で訪れたオーストラリアでのこと。といっても、計画性があつたわけではありませぬ。そのときは以前から憧れていた留学中にも関わらず、現地の人たちに冷たくされたり、ちょっと精神的に参って、何か人と触れあう体験をしたいと、その場で急に思い立ったんです。

一人の女の子と出会い、彼女と接する毎日を送ります。彼女は7歳になるけれど、言葉が話せない。そのため精神的に不安定で、言うことを聞かないし、人をぶつこともよくありました。でも、良くも悪くも、感情を素直に表す子だから、私と会ったことがうれしくて、笑いが止まらなくなったり、私が疲れていたら、ジェスチャーで、寝たらうっついて心配してくれたり。そういうストロートな彼女の行動が、そのときの私には何よりあたたかく感じました。ボランティアって、一般的に、自分より弱い誰かを助けてあげる行為のように思われていますよね。でも、私の場合、自分を必要としてくれる彼女と向き合うことで、ようやく自分の存在を見つげられた。本当に助けてもらったのは、きつと私の方だと思います。

ボランティアで、努力の価値を感じた。これは、私の生活を充実させる手段。

YMCAが子どもを対象に行っているキャンプをお手伝いしようと思ったのは、私自身が小さい頃からこのイベントに参加してきたから。今度は、私が子どもたちを楽しませてあげようと思ったんです。活動内容は、小豆島の近くにある小島「余島」で、参加者と一緒に2泊から長いものでは12泊程度のキャンプを運営。キャンプ全般の準備や子どもたちの監督を行います。

最初はボランティアとは言え、思い出のキャンプにもう一度参加できるのをうれしく思いに思っていました。実はこれが甘かった。何を言っても反抗する子はいらぬし、夜眠れない子がいたら、付きっきりで自分まで眠れないし、人を楽しませるために、どうして自分がこんなに大変な思いをしなきゃならないんだろうって、本気で悩みました。

だけど、そんなふうにならなくても、キャンプに携わっていくと、キャンプが楽しみで毎回来てくれる子どもにも気がついたり、自閉症と聞いていた子が、ここではたくさん友達を作っているのを見た。いつの間にか、自分が頑張ることの意味がわかるようになってきたんです。ボランティアって、無償の行為のように思われがちだけど本当は違う。

自分の生活を充実させるための手段の一つでもあるんです。



経営学部経営学科 4年次 吉田 瑠美さん



『NPO/NGO論』担当、宮垣 元 講師にインタビュー

自分らしく生きるため、ボランティアの自発的な行動方法を知って欲しい。ボランティアという言葉には、どうしても無償の奉仕というイメージがついてまわりますよね。だから多くの学生は、頭から、自分とは関係のないものと感じてしまつて、さすが実は、その語源となっている「ボランティア」という言葉「これは、自由意志」という意味なんです。つまり、ボランティアとは、自由な意志に基づいて自ら進んで行動を起こすこと。国や企業の枠組みではできないことを、例えば、NPO、NGOといった組織や活動を通じて、「自発的に実現していく」というあり方そのものなのです。私が学生に、ボランティアに目を向けて欲しいと考えているのは、まさにその点。

いまは、インターネットの普及などにより、社会が自発的に動きやすい構造となってきました。やりたいことを実現する枠組みは、企業に入るか、公務員になるかだけではありません。自分から行動を起こす可能性も視野に入れると、より自分らしい生き方が選べるでしょう。いま、ボランティアを学び、実践することは、そうした生き方を発想するうえで、非常に有効な手段なのです。

”かわいそう”という気持ちはない。助けられたのは、自分の方かも。



開学
50周年
記念特集

MOVE IN KONAN
シリーズ第5回

「大学から世界に飛び出し、何を学ぶ？」

近年、各大学で、海外の大学と交換留学などで提携し、留学中の学習成果を卒業単位として認定することで、チャレンジしやすい環境を整えるなど、より多くの学生に、幅広い海外体験の場を提供しようとする動きが盛んになっている。興味深いのは、これが外国語教育を専門とする大学や特定の学部だけでなく、全般的な大学や学部に通ずる傾向ということだろう。いま、大学は、外国語の習得やコミュニケーション能力の向上以外に、何を目的として学生の海外体験を支援し、奨励するのか。甲南大学での取り組みや海外体験者のコメントから、世界に直接触れて学ぶことの意味を探った。



① 図書館のオリエンテーションのほか、講演会などでも使用できる92席の視聴覚ホール。
② 1Fエントランス。図書貸出機を設けており、混雑時もスムーズ。
③ 発行より1年を過ぎた雑誌、各大学の紀要などは5号館地階の雑誌館に収納。海外の学術雑誌なども豊富に揃え。

キャンパスライフ
ここが知りたい!



図書館編

「図書館は、どのようにつ 利用されていますか？」

甲南大学図書館職員 田原洋之さんに聞きました



こんなときに利用しよう！
図書館のススメ。

その1 レポートを書くために、資料の利用と集中できる場所が欲しい。

その2 授業の空き時間に、ビデオやDVDなどを観たい。

その3 視聴覚ホールで放映されている、衛星放送の番組を観たい。

その4 書名のわからない本を探るときなどに、気軽に誰かに相談したい。

外部データベースの充実

昨年10月より、新たに新聞や雑誌の情報をオンラインで検索できる、特徴の異なる6種類のデータベースを導入しました。これにより、学内のあらゆるパソコン、または自宅のパソコン、ただし、Netのダイヤルアップ加入が条件から、図書館の本ホームページにアクセスすることで、自分の欲しい情報をスムーズに引き出すことができます。レポートや卒業論文の作成、日々の学習にぜひ役立ててください。

学生のなかには、レポートの提出前くらいしか図書館を利用しない人も結構多いのではないだろうか。でも本当は、自分自身のキャンパスライフを充実させるため、できるだけ日常的に活用して欲しいものです。なぜなら、大学の講義というものは、知識も大切ですが、新たな視点を身につける意味合いが大きい。そのため、知識を深めるには、どうしても授業で感じた疑問や興味を、自ら調べ、確かめることが必要だからです。つまり、図書館をいかに利用するかは、在学中に何を身につけられるかを大きく左右する、一つの力ギと言えるでしょう。



③ ROMなどを充実させたり、いろいろ工夫しているんですよ。甲南大生なら、この充実した施設を使わないという手はありません。卒業生も利用できますから、ぜひ気軽に訪れてください。

図書館ではこうした要望に応えられるよう、専門図書など約78万冊を所蔵するだけでなく、新規の図書のリクエストも随時受け付けています。また図書だけでなく、CD-ROMやインターネットを利用して、新聞や雑誌の情報が検索できる外部データベースの導入を進めています。利用頻度の高いCD-ROMなどを充実させたり、いろいろ工夫しているんですよ。



文学部社会学科OG 大井明子さんが語る

暮らしを共有してはじめて、異なる文化に共感できる。

大学を卒業後、2年間、青年海外協力隊員として、中東・ヨルダンの大学で、水泳の講師を務めてきた大井明子さん。開業途上国の支援という目的のかたわら、ヨルダンの人々と生活を共にしてきた彼女は、そこでどんな体験をし、何を感じたのだろう。自分の肌を通して、世界を知ることの意味について語っていただいた。



仲良くなったクラスの生徒たちと、プールのそばで。休みの日はよく一緒にご飯を食べに行きましたが、なぜかいつもイタリアンでした。

大井明子さんは、1999年に文学部社会学科を卒業後、青年海外協力隊への参加を志願。10年以上、水泳のインストラクターをしてきた経験を生かして、中東のヨルダン大学で、スポーツ技術の支援を行う任務に就いた。彼女が、青年海外協力隊という特殊な海外体験を選んだのは、どんな理由からだったのだろう。

「最初はただ、好奇心からの挑戦だったんです。青年海外協力隊なら、留学とは違う国に行けるから面白そう、くらいなのね。ところが採用されたのはいいけれど、任地が中東と聞かされて、漠然と不安を感じていました」

「そこで私を待っていたのは、想像以上に大変なことばかり。例えば、水泳を教えようにも、ほとんどの生徒は、大量の水が溜まっているのを見たことさえないんです。日本では信じられないけれど、水への入り方から教えなければなりません。また、アパートを借りて一人で暮らしていたので、病気になるという現地の人の手を借りることに。すると、胃をこわしているのに、鶏の丸焼きが出てきたりするんですよ。こんなのに、絶対に食べられない笑」

「私も最初は、淡々とした口調ながら、そこにこもる大井さんの思いは強い。自分の目で見て、肌で感じてきたことが、彼女の揺るぎない信念となっているのだろう。海外に直接触れること。それは、他国の文化を、知識としてではなく、そこで暮らす一人の人間として理解していくことなのかも知れない。」

現在、ヨルダン大学で水泳の指導者として働いている2人。彼女たちにはずいぶん支えられました。



国際交流センター 西村順二所長が語る

新しい価値観に出合ったび、将来の可能性を広げられる。



世界8カ国11大学と交換留学および語学講座の提携を結び、留学先で取得した単位を、卒業必要単位に加算できるようにするなど、全面的に学生の海外体験を支援している甲南大学の留学制度。国際交流センターの西村順二所長に、その狙いをつかかった。

アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、ドイツ、フランス、中国という世界8カ国の大学11校と、交換留学および語学講座の協定を結んでいる甲南大学。プログラムも夏休みを利用して集中的に語学を学ぶ『海外語学講座』、1年を通して提携大学の授業を受講する『外国留学』など多彩に用意し、学生がレベルや目的に応じて異文化に触れられるよう配慮している。このように海外体験の場を広く提供する背景には、どんな狙いがあるのだろうか。

しかし、実際に留学を体験した学生には、本心に、そうした内面の成長があるのだから。また、新しい価値観を身につけることは、自分の生き方を具体的に、どう変えていくことに結びつくのだろう。

「これは、カナダのヒクトリア大学でビジネスを学んできた、ある学生の話ですが、彼は帰国すると、なぜかアジアについて学びたいと言いはじめましたね。もともとアメリカ圏のビジネスのノウハウを知りたくて留学したはずなのに、どうしたのかと尋ねてみると、現地でも中国や韓国からの留学生と友達になっただけで、彼らと話していると、日本はアジアの一員として認められていないことをひしひしと感じる。だから、自分がアジア圏で何をすべきかを確かめてみたくなった、と言っています。彼はいま、新しい可能性を探すべく、国際関係の大学院をめざして勉強しています」

「本学が一人でも多くの学生に、海外での学習を体験してもらえるよう考えているのは、留学の目的が単なる語学研修には留まらないため。外国語を流暢に話すだけでなく、学内にもネイティブの先生方による講義がたくさんあります。それで足りなければ、英会話学校などに通う方が、あるいは留学ほど手間もかからず、効率的かも知れませんが、しかし、我々が本当にめざしているのは、学生が、自分の持つモノの見方を増やし、価値観を広げることです。そのためには、実際に異なる価値観に出合い、なぜだろうと考え、理解しようとする体験が、非常に効果的。自分と異なる文化の中に、直に身を置く海外留学は、それを実践するために、最も適した場と言えるでしょう」

もちろん、すべての学生が彼のようには留学を経て、生き方、考え方を大きく変えるわけではないだろう。しかし、異文化との出会いを通して、新しい価値観を身につけることは、程度の差こそあれ、いままで考えられなかった発想を得て、自分の生きる可能性を広げることにはかならない。甲南大学では、昨年123人が海外での学びを体験している。彼らはいま、留学前より少し広がった可能性へと歩み出しているに違いない。

留学制度の特徴

海外語学講座

夏休みを利用した約1カ月間の短期集中語学講座。英・独・仏・中の4カ国語から選択できる。語学と同時に、文化・生活に触れるカリキュラム。

外国留学制度

約1年間、海外の大学(甲南大学の協定校)で学ぶ。履修した科目は、甲南大学の単位として認定。留学先での授業料は免除される(授業料は甲南大学に納入)。



甲南大学文学部社会学科4年次 藤井まき子さん

高校は、できるだけ、いままでとは違う体験ができる学校を選ぼうと思っていたので、フランスで学ぶトゥレーヌ甲南学園のことを聞き、思い切って挑戦してみようと思った。フランスでは、せいかく海外まで来ているのだから、という思いと、自分から主張しなければ何も思い通りに進まない文化の違いがあり、とにかく積極的に行動するようにしていました。例えば、寮で生活すれば、日本人同士で付き合えるから楽なのですが、フランス語もろくに話せないのに、あえてホームステイを希望したり、2年生からの選択コースでは、日本の大学受験をめざす文系・理系コースではなく、フランス語を徹底的に学ぶフランス文化コースを選んだり。失敗も多かったけれど、挑戦し続ける毎日は私にとってとても新鮮でした。結局、日本に帰って思うのは、ここで学んだ一番のことは、フランス語じゃない。違う文化の中で自分を主張する力を身につけられたことが、いま、何にも物怖じしない行動力として生きています。



上 / 昨年7月にトゥレーヌ甲南学園時代のホストファミリーを訪ねて、避暑地のフランス・プルトーニュ地方へ。会うのは4年ぶりでしたが、以前と変わらず温かく迎えてくださいました。右上 / フランス語のクラスメイトと。先生は日本語を話さないで、授業はもちろんフランス語で行われました。右 / 隣接する地元の中学校と合同で開催される体育祭では、実行委員をつとめ、ユニセフの募金活動なども積極的に実施。



仏校2級の実力を発揮できる株 堀場製作所に今年4月から勤務予定。



トゥレーヌ甲南学園は、世界的視野をもつ人物の育成を目的に、フランス・トゥレーヌ地方に甲南学園が開校している日本人学校。文部科学省の認定を受けた中等部・高等部があり、現地で暮らす日本人の生徒や、日本から海外に挑戦したいと考える生徒の学びをサポートしています。

トウレーヌ甲南学園 中高生に対しても、徹底した海外での学びをサポート

フランスでの3年間を通し、身につけたのは、自分で切り開く力。

卒業生に聞かへ、トウレーヌ甲南学園の学びについて



New York City

Report 3 EBA高等教育研究所 岩崎晃所長が語る

自発性を促すシステムで学び、学習方法そのものを変革する。

2002年4月よりスタートする、甲南大学の新たな学び「EBA総合コース」。経済・経営学部の枠を超えて展開される革新的なカリキュラムでは、2年次の後期から3年次の前期まで、海外の提携校で学ぶ期間が設定されている。これには、どんな力を養成する目的があるのだろうか。EBA高等教育研究所の岩崎晃所長に尋ねた。



1学年35人のEBA総合コースでは、少人数制のメリットを生かし、クラス全員がニューヨーク州立大学バッファロー校で学ぶ、1年間の海外学習をカリキュラムに組み込んでいる。同コースで経済学の分野を担当する岩崎晃教授は、他に例をみないクラス単位の留学を、次のように説明する。

「本コースの学生は、バッファロー校に赴き、経済および経営の正規の講義を、現地の学生に混じって受講します。しかも、習熟度に応じた講義が提供されていますが、基本的に初級レベルの講義を受講する予定はありません。ここで、かなり専門的な知識を身につけようというわけです。」

つまり、EBA総合コースの留学が意図するところは、単なる語学留学ではないというわけだ。岩崎教授は、経済・経営の専門講義を海外で学ぶ必要を次のように語る。

「教育システムが全く異なる環境で学ぶことに大きな意義があります。日本では、おとなしく授業を聞いて高得点を取れば優良な生徒と思われませんが、アメリカでは逆。そもそも先生が何もかも教えてくれるという発想がないので、自分からどんどん発言し、教授や仲間とディスカッションしなければ、真の意味での能力を開発することができない。こうした環境で学ぶからこそ、テキスト通りの知識を覚えるのではなく、一つひとつを自分の体験として、本質から理解していくことができるのです。」

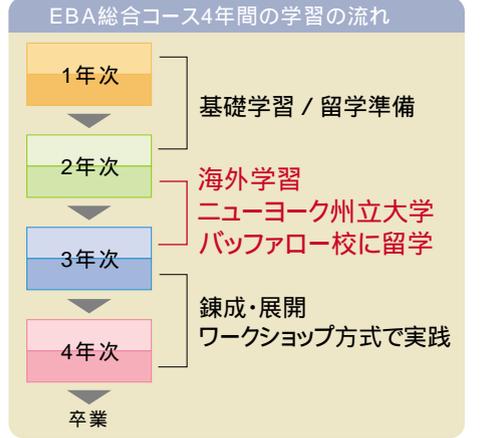
また、留学期間を2年次の後期からとしている点も重要なポイントと、岩崎教授は強調する。

「本コースでは、経済、経営ともに英語のテキストを使い、バッファロー校での授業に対応できる力を養成。大学生活のできるだけ早い段階で、この海外体験を提供できるよう配慮しています。これは、自分が知り

たいことを追究するために学ぶ、能動的な学びのスタイルをいち早く身につけて欲しいから。これにより、その後の学習のモチベーションまで、大きく変わってくるはずだ。」

EBA総合コースが海外体験でめざすこと。それは海外の文化に目を向けること以上に、異なるシステムの中で学び、学習の概念そのものを覆すことのようなのだ。こうした革新的な学問の追究スタイルこそが、既存のシステムを超え、新しいビジネスの可能性を拓く新コースの学びを実現していくのだらう。

OGの実体験、あるいは甲南大学のさまざまな試みから見られたように、海外を訪れて学び、何を学べるかは、ただ外国語でのコミュニケーション能力を向上させるという一元的なことではない。あえて自分と異なる価値観の中に飛び込むことは、それまでの価値観を超えた発想を身につけ、新たな世界を拓いていく有効な手段と言えるだろう。世界に通用する思考力、表現力、行動力をしっかりと身につけることをめざして、甲南大学は海外での学びを積極的に支援している。



甲南大学の学生と岡本商店街が協力して清掃活動を行う、東灘区のクリーン作戦。2000年3月からスタートし、年々規模を拡大しているこの試みは、戸山晶夫理事長の発案によるものという。「あれは、私が、町の美化を考える東灘区まちづくり推進課主催の集い、“美・緑・花 神戸ワークショップ懇談会”に出席し、美しいまち岡本協議会など、地域の方々や直接話をしたのがきっかけ。地域の方々が町の美化を真剣に考えておられることを知ったので、我々大学も協力しなければと考えました。そこで、自治会委員長の西川幸宏さんに、学生として何か協力できないかと話をもちかけたのです。彼は一見、ヌーボーとして、つかみ所のない印象でしたが(笑)、『春休みにクリーン作戦を実施する』という結論を、実に素早く提示し、実現してくれた。正直、感心しましたね。クリーン作戦当日は、もちろん私や学生部長も参加。地元の人々と学生と一緒に、苦勞を共にする姿を直に見て、参加した学生はもちろん、これを見た学生の意識が少しずつ変わっていくのではないかという期待を感じました。

いまは、世界規模でものを考えなければならぬ時代ですが、それは、地域を見過ごすということではない。自分たちに身近な地元の問題に向き合う中から、世界規模の問題を解決する方法が見えてくるというケースもあるのではないのでしょうか。西川くんをはじめ、積極的に参加してくれた甲南大生たちの姿を見て、そんなふうに思います」



Toyama Akio
戸山晶夫・甲南学園理事長

先輩から、後輩へ。受け継がれた思いが、クリーン作戦を実現。

Nishikawa Yukihiro
西川幸宏さん(2001年経営学部経営学卒業)

自治会委員長という立場からクリーン作戦を実現させた西川幸宏さんは、イベント立ち上げの苦勞をこう振り返る。「戸山理事長とは、大学のパーティなどでお話をさせていただく機会があり、この話もそういう席で持ちかけられました。最初に話を聞いたときは、軽く考えていたので、簡単に引き受けてしまいましたが、いざ、クリーン作戦を行うとなると、学生を集めるのが想像以上に大変。体育会や文化会のクラブに協力してもらい、看板をたてたり、ピラを配ったりしました。自分の予測では、300~500人は集まると思っていたのに、結局は150人くらい。安請け合いました手前、ちょっと申し訳なかったです(笑)。当日は、朝9時半から昼まで、大学周辺と通学路、山手幹線を、何通りか道を分けて清掃。実際に、はさみとゴミ袋をもって、ゴミを拾っていききました。ところがここでもハプニングが。よく知っている道なのに、実際に清掃してみると、想像以上にゴミが多くて作業がなかなか進まず、時間が足りないんですよ。清掃も大切だったけど、その前に、ポイ捨てを無くす意識がいかに大切かを実感しました。

この活動は、僕が卒業してからも参加人数が徐々に増え続けているようです。クリーン作戦をきっかけに、大学祭のチケットを買っていただくなど、住民の方々や親しく接する機会が増えたと聞いています。うれしい限りですね。今後はもっと、同じ地域の大学にも参加を呼びかけ、地域の交流を深めていって欲しいものです」



4期生として甲南大学経済学部を卒業し、1999年に、本大学の卒業生として初の理事長に就任。卒業生だけに、先輩・後輩のつながりを何より大切にしており、学生に対する視線は、教育者というより、まるで身内のように!

29期自治会中央委員会の委員長として50人の委員をまとめる。卒業後は、松下リース・クレジット株式会社関西支店に勤務し、松下グループ営業第3チームに所属。学生時代に培った責任感とやる気は、ここでも生かされているとか。



Seminar
ゼミ編

中易ゼミ

理工学部情報システム工学科
中易 秀敏教授



中易ゼミは、「視覚や脳」といったまだよく知られていない分野を研究対象としているので、日々発見があり、とても興味深く研究しがいがあります。中でも今、僕が最も興味をもって取り組んでいるのは、「運転の際の視覚情報処理」というテーマ。自動車を運転しているとき、人は普通に何もしていないときよりも視野が狭くなります。例えば、自動車のスピードや道路の混雑状況などで、見え方はどう変わるのか。また、どのような範囲のものを認識することができるのかについて、3Dカメラを使った視覚実験などを行って研究しているんです。

「このように、中易ゼミの研究は実験中心。まず調べたいテーマを理解することから始まり、それに対する予測検討をし、各パートに別れた実験を行います。その実験結果をもとにデータを解析して立証していきます。実験はゼミ全員の協力によって成り立つものですから、予測をした通りの結果が出た場合などはとくに一体感が味わえて、とてもやりがいがありますね。

みんなで一つのテーマを研究しているからでしょうか、中易ゼミはいつもアットホームで和気あいあいとした雰囲気です。ソフトボール大会など楽しいイベントがいろいろあることも、チームワーク作りに役立つと思いますよ。」

注・理工学部経営管理学科は2001年4月より理工学部情報システム工学科に改編されました。



「視覚情報処理」をテーマに実験・検証。チームワークのよさが自慢のゼミです。

理工学部経営管理学科 3年次 森 邦和さん

経済の“超短期”動向を、世界中に張り巡らせたネットワークを使って分析。

現在のよつこ景気の舵取りが非常に難しくなっている時代に、現状に対する判断を誤ると、とんでもないミスを犯すこととなります。企業の関心も一年先にどうなるかではなく、今期に収益が上がるか上がらないか。金利は物価は上がるのかどうかということにあります。そのような求めに対して、できるだけ具体的な情報を提供するために、私の研究室では「超短期」つまり3カ月、6カ月後の日本経済の先行き予測を行っています。具体的には、各都府県から発表される月次データなどを分析し、私の構築した国際的なネットワークを駆使して半年先ま



Laboratory

研究室編

稲田研究室

経済学部経済学
稲田 義久教授

での経済動向を予測。超短期“予測結果は、日経クイックに隔週で、また英語のレポートはプロジェクトリンクのウェブサイトに link@chass.utoronto.ca において発表しています。GDP(国内総生産)を予測しているのですが、それがダイナミックに変化していくのを分析しながら、現在の経済の景況について、マーケットにシグナルを送っているわけです。

超短期“予測モデルは、マーケットの一般的な平均の予想よりも1~2カ月くらい早く市場の動向を予測できます。日本のシンクタンクでも、最近よつこや超短期“予測に注目し始めました。私の研究室でもこれからさらに、すばやく景況を予測する手段”についての研究を深めていきたいと考えています。

プロのコースに出られる特権付き。
見事な緑の中でのプレーは最高。



Sports

体育会
ゴルフ部



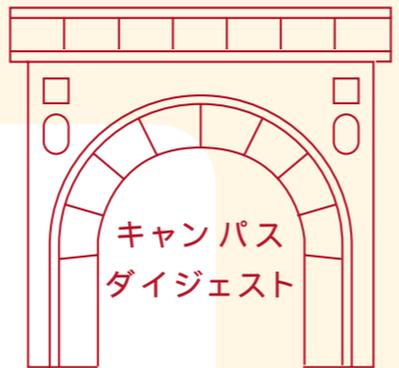
現役プロゴルファーをコーチに持つ、体育会ゴルフ部。普段の練習は鈴蘭台にある「打ちっ放し」で行っていますが本格的なコースに出ることも頻繁にあります。なかでも、コーチ自身が所属する、ABCゴルフ倶楽部」などは、国内最大級のトーナメント開催地というだけあって、ハザード(障害物)の設計や芝の状態が見事で、プロをも唸らせるほど。学生のうちからそんなコースを体験できることは、かなりの特権と言えるでしょう。「風景がすごくきれいで、緑の中を歩いているだけで気持ち晴れ晴れする。『ゴルフ』オジサンのおスポーツ」というイメージが180度変わりますよ」と、主務の花岡幸明さんはその魅力を力説してくれました。

部員は現在22人。元・世界ジュニア選手や高校生のときに国体選手だった部員もあり、お互いに仲がよいので、それぞれが切磋琢磨しながら、トッププレイヤーをめざして気力、体力、技術の向上に励んでいます。

同部の自慢はチームワークの良さ。これも2000年秋のリーグ戦が一つの転機になったと、関西学生男子1部リーグへの昇格がかかった大事な試合で、しかも相手は強豪・関西学院大。甲南大が不利と言われるなか、選手はもちろん、OB・OG、学友までが一丸となって挑み、接戦の末、見事ウィニングショットを決めたのです。興奮の激しい渦のなかで、チームが「一気にまとまった」といいます。「個性豊かな猛者の集まりですから、楽しいことは間違いない(笑)」。花岡さんはかけがえない仲間をこう表現してくれました。

2001年度リーグ戦の成績は、春季、秋季ともに3位を確保。春季リーグ戦では、主将の平松賢育さんが最優秀選手賞に輝きました。めざせ、優勝!

CAMPUS DIGEST



第46回甲南大学対学習院大学
運動競技総合定期戦閉幕。

第46回甲南大学対学習院大学運動競技総合定期戦の全競技が終了し、12月8日、大会当番校の甲南大学で閉会式が執り行われました。23競技28種目にわたる熱戦の結果、21勝7敗で甲南大が勝利をおさめました。通算成績は甲南大が43勝2敗1分けて現在9連勝中となります。

閉会式には吉沢英成学長、青山義孝学長、永田良昭・学習院大学学長、塩谷清人・同学生部長など両大学の教職員、学生が多数参加。成績発表、優勝杯の授与に続いて、両大学の学長、学生部長らの挨拶がありました。

このあと、応援団によるソールの交換、校歌の斉唱が行われ、勇壮で厳肅な雰囲気の中で閉会式は幕を閉じました。



「ベンチャー精神を伝えたい」。
起業の大ベテランが、
そのノウハウと心意気を伝授。

12月10日、8号館812講義室でEBA高等教育研究所の第1回講演会が開かれました。ゲストには、ベンチャービジネス界では知らぬ人のない、パナグループの代表、南部靖之氏が招かれました。学生時代に自ら会社を興した経験を持ち、今も、新分野に挑み続ける起業の大ベテランです。

「ベンチャー精神を伝えたい」と題した講演は、午後4時30分から、氏のエネルギーあふれる口調でスタート。大学時代に1年間、シルクロードを旅したこと、22歳のとき、何も分らない状態で人材派遣会社を作ったこと、神戸から東京へそしてニューヨークへと渡ったこと、今でも自分の礎となっている父親の格言など、興味深い体験が次々と語られました。目を輝かせて聞き入る学生たち、氏は、すべては夢と志から始まる。大切なのは社会に対する使命感。お金のため、自分一人の幸せのためであれば、ベンチャーなんてする必要がない」と熱を込めてメッセージ。ベンチャーに強い関心をもった学生たちは、しつかりとその言葉を受け止め、自身自身の心に刻み込んだようです。「今の学生の考えていることを知りたい」という氏のたつての要望で、質問もどしどし受け付け、そのすべてに率直に回答されました。閉会時

「人と土地のつながり」をテーマに、
日本各地の田舎を探訪。



北は新潟から南は高知まで、日本各地をまわって、フィールドワークを行う、文化会人文地理学研究会。現在、部員は30人。毎年2回、例えば、「人口1万人以下の町」など行き先を決め、5泊6日の合宿を行っています。現地へは、なるべくお金をかけないようバスで行き、宿泊先も安い旅館や民宿など。現地では、「歴史・風俗」「生活・集落」「産業」「行政」の4つの班に分かれ、それぞれ調査に乗り出します。民家にあおろぎながら、暮らしぶりを聞いたり、役場に出向いて現在の状況や問題点を取材したり、積極的に内部まで入っていくことで、書物などでは分からない貴重な発見が。例えば、昨年訪れた香川県琴平町は、「地区によっては店がほとんどなく、車がないと生活できないんです。僕たちには考えられない」と会長の小川聡司さん。部員には、いわゆる「都会っ子」が多いので、文化の違いに驚くことが多いそうです。

神戸に帰ってからは、各班のレポートをもとに、どうすればその町がさらに発展できるかを検討します。「壁画を描いてみてはどうか」「せつかく湧いている温泉を、外湯」という形で、もっとアピールしてみてもいい」と、自分たちなりにまとめた「町おこし」の方法を大学祭などで発表。お世話になったお礼も兼ねて、町へも提案してみたとか。反応は今のところ、「うーん、どうなんだろう...」というところですが笑」と小川さん。また、調査結果をまとめた報告書「えくめね」を発行。役場の方やOB・OGなどへ届けています。今夏の調査予定地は、山口県の大島町さて、どんな報告が寄せられるのでしょうか。

Culture

文化会
人文地理学研究会



刻の午後6時を過ぎたあとも、氏が着しようにしている新しいビジネスについて熱弁をふるい、学生ラルハイトまで募集。この熱いベンチャー精神は、少なくとも今回参加した150人の甲南大生たちには確実に伝授されたに違いありません。



辛亥革命90周年国際学術討論会
と合わせ、歴史文化学科開設
記念講演会を行う。

清朝を倒し、中華民国を樹立した辛亥革命から90年目にあたった2001年。中国革命の父、孫文ゆかりの地である神戸での歴史的意義について話し合う国際学術討論会が開かれました。日程は12月13日から



16日まで。その前夜祭として、今年度文学部に歴史文化学科を新設した甲南大学でも、南京大学歴史研究所長の張憲文氏を講師に、講演会を開催。「辛亥革命についての考え方」について、さまざまな論説をいただき、大変貴重な催しになりました。

